

子どもたちの心にとどく詩を

——「うはなこを声このせよう」——

穴倉 さとし

このところ、少年詩への関心が高まり、その書き手も次第に増えてきつつある。毎年三十冊前後の少年詩集が、コンスタントに出版されていることは心強い。と同時に、少年詩をどのようにして読者対象である子どもたちに届けるかが、喫緊の課題ではなからうかと思う。

近年は、全国各地域で朗読研究会、親子読書会等のメンバーにより詩の朗読が行われ、教育の場でも音読、群読、朗読劇等を導入するなどいろいろな試みがなされていることは喜ばしいことである。願わくば、おとなも子どもも詩を読み、詩を朗読し、詩を暗誦することが、ふだんの生活になじんでくれればと念じている。

二〇一〇年の詩集について

さて、昨年一年間にも、オーソドックスのものから新しい表現性追求のものまで、約三十冊の詩集が発刊されているが、そのいくつかについて触れてみたい。

内田麟太郎詩集『ぼくたちはなく』（PHP研究所）序詩の「ぼくたちは」から作者の意気込みを感じ引きつけられる。「泣く」と「笑う」の二章、全四十一編。幼少時に母と死別した寂しさをベースにした詩をはじめ、やさしく、切なく、ときには強く、読者の胸を打つ作品から、ユーモア溢れる言葉遊びまで多彩な発想が魅力の詩集。高学年以上の読み聞かせ、朗読させたい詩が多く収められている。絵本作家であり、詩人である作者の少年詩集第三作。

武鹿悦子詩集・伊藤英治編『たけのこ ぐん！』（岩崎書店）四章構成、代表作五十六編収録。子どもの視点で日常の風景をリズムカルに楽しくうたい、いずれの作品も新鮮さに輝き満ちている童謡詩集。小学生でも読めるように、大部分がかなで書かれ、漢字は必ずルビを振るという配慮が嬉しい。好きな詩は表題詩と「山道のトンネル」。擬音もまたポエジー（白秋）を実感。子どもたちでできれば声に出して読んでほしい詩集ちなみに、編者の伊藤英治氏が昨年暮に六十五歳で逝去。本誌『日本児童文学』編集にも係わりのある名編集者であり、痛惜の至り。